

## 最優秀賞

### 「穴吹でおこつた激甚災害被災者の体験談」

美馬市立美馬中学校 一年 逢坂 啓

僕の曾祖母の弟は、今年九十五歳になりますが、今も畠仕事を元気になすスーパーおじさんです。そんなおじさんが体験した、穴吹町で起きた災害について聞いてみました。

昭和五十一年に起きた災害では、甚大な被害が出て、古宮では一人が亡くなつたそうです。災害が起つた直後、中山家の家族が全員無事だと確認したおじさんは、親戚の家が川の近くだため、心配になり、探しにいつたそうです。親戚の家にいたとき、「あつ、これはあかん。」と最悪の事態を想像しましたが、周りの家や店などは、みんな土砂で流されるも、親戚の家だけが流されずに、奇跡的に残つていて、親戚が助けを待つていました。災害発生から三日後に復興の為、自衛隊の人がかけつけてくれました。なかでも自衛隊の人が寝泊まりしたところが、被災した内田地域の中でも、高いところにあり、安全とされた中山家だったそうです。朝から晩まで、おじさんは、復旧作業を手伝い、おばさんは自衛隊の人たちの食事など身の回りの世話をしていたそうです。国は、昭和五十一年の災害を激甚災害に指定し、復興支援で莫大なお金が支援されました。

おじさんが作つていた田畑は、すべて土木工事の資材置き場になり、建設会社の人たちが、道具や橋を直したりするのに、必要な場所になりました。また、土砂崩れで、山肌が赤土になつてしまつた場合には、新しい植物が育つよう、植物の種と肥料を混ぜたものをヘリコプターで、まいてまわつたそうです。おじさんは、ヘリコプターがこの種の入つた袋を空からまいている間、次にまく種と肥料を混ぜる作業をし、次々に赤土のところにまくという作業を繰り返して、三日がかりで、新しい種がまかれました。三日後には、初日によみた所からもう芽が出て、赤土だつたところに緑が広がりはじめていたそうです。

災害後しばらくして、おじさんの母校である古宮小学校の運動場に仮設住宅が建設され災害後三年で、元の場所に住めるようになり、六、七年かけて、道路など生活は元の通りになりました。しかし、そのとき流された家人や周辺の人たちの中には、災害のあったこと、利便性が悪いことを理由に、町の方へ家を建てるなどしてふるさとを後にし、出ていった人もたくさんいた

そうです。

話を聞いていて、驚いたのは、飛び降りたら大けがをするくらいの高い橋の川にたくさんの土砂が流れ込み、その橋が土砂にうまつてしまつたそうです。実際に現場に行ってみましたが、とても高い橋で、何メートルも土砂で埋まつたということがわかり、僕はとても怖くなりました。

話を聞いたとき、おじさんから頼まれたことがあります。「種をまいてから四十八年が経つた。わしは、君に、この赤土だつた山肌がどんなになつてているか見てきてほしいんじや。今は、そこまで行くことができんけんなあ。」

僕は夏休みに、土砂災害で、山が崩れた場所を家族で見に行つてきました。周りの木々と比べると大きさや色合いは少し違いましたが、ぱつと見るだけではわからないくらい緑が復活していました。

この災害は、激甚災害に指定されたため、復興の為に国から公共事業として、たくさんの仕事が被災した地元の人にも依頼され、そのことで復興も進み、そして収入源になり、被災して大変だったが、金銭的に助かつたそうです。僕がこの話を書こうと決めたのは、おじさんが、実際に地元で被災し、復興工事をした最後の人になるといつてたからです。

おじさんが、僕に絶対に覚えておきなさいと教えてくれたことがあります。「この雨なにかいつもどちがう?なんかおかしい。」と少しでも思つたら、すぐ、安全な方へ、逃げるということです。災害のときは、流れてくる水すべてが泥水になり、「ごごごごごごごお」という聞いたことがない音、地鳴りがすると必ず土砂崩れが起こるので、少しでも、おかしいぞと思つたら、安全などころに、早めに逃げなければいけないと思いました。